戀香
繡史

朧月夜物語

一

新口七香五冊

へ遠13
1850

文化13へ
1850
1-5

文化庚午新鐫

稗海亭柳浪著述

朧月夜物語

全部五冊

尚左堂俊満圖畫

なふはらそゆらしよ深なし浜沖
あはれ七海のなみしハとらなのわ近
松氏西鶴なるそ者はまとうかゆを
の影ともしはねもろとをはくの名
ハ高のわかれ者こかめわ高わらう寸
とかるるのしとよ化者ハ松ハいて
けはるとまるうなつうしよものて
おもはのるるふなと宝後満る紀
たわていはらうわの浦ようて

笠ハ羅波なる柳
しまてるまつもなわうの人の
とかるまま松つしよ物語ハ傳
ろかとしはるとをとを
るとはわといふるの山て心の九つ松ま
わるかるつしるの人のるとまるハ
うるるまるまてろハいてこて母
ものうなるとしとはををハうわ松ま
はんよハ学まるしるの人かるよわ

も花やうの枝をおもはせ[illegible]
なるとそのうすくれ[illegible]
那よりひろの海[illegible]
[illegible]
にしかわさとやく[illegible]
あまのゝく[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

乃ゝとゝのゆあふらぬしもまゝくの
うひ當ふしなれわとれかの者ま
まし[illegible]
すゝふ[illegible]
ひあへぬふて[illegible]
人のほゝ[illegible]

六月樹園主人

朧月夜物語叙

曙野屋秘

おぼろ月夜なる漁村の柳
を強の音絶えて櫛のくもを寄ふ
きくもなき雲もいまは交もなく又むらくと夕
ぎり川雲の中ぐもひかめられぬ光めいぐ
るのもあ中をみいづる秋の月をうつす
ゝ新鮮ときえ名殘る庭のもをとゝる
玉の簾と吹ぐこのえるゝ風ゝつゝの世をこ

ゝの月ゝ強さゝゝいつゝの中よまとあゝく遠
山さゝゝ乃雲ゝあゝ強ゝ花とゝらざ
ふづゝ去ゝ法ゝ雲ゝ又ものゝハをゝ
きゝ出ゝ花のこのゝ多まをんゝなるべゝ
空中の月をゝゝこのけゝる鏡ゝとゝ
つゝゝゝ世ゝゝ鏡なゝあをかゝみゝ
きゝ新ゝおゝゝきゝ墨ゝ見ゝその和乃風
はゝをいゝゝゝ比喩ハ老佛の方便のみ

のて比無無く弓矢の六義のうち和の女
性をるもの其の焼を見ぬふりをやこと女
のまことを弱なる我男子松乃道をるべ
らるゆえをとゝえあきを崇ゝをもを苦る
弱をひやゝをもとゝ抜こに世ひあり書る
忠臣孝子の妻なるべき抜ちを抜ゝ後ふ
世を必づるを重おるゆるめ抜の色のまを
やうを抜ゝ初ゝこの外ゝ節婦烈女のとく

せゝでらるゝ志ぬ抜ゝ抜をやる乗ゝ
重の中なるかとう松乃みどりの色をうへとる
ふ似ゝかゝてふつゝもの中ゝまとあり初ゝく
抜をとるゝを仁のゝとゝまゝもいあれ
はゝゝゝ世ゝ人ゝゝろを世ゝ抜ゝ事とゝ
ゝうゝ年ゝ物ゝゝたをれあゝこのゝまゝ
春のはゝえ乃ゝ抜ゝ抜ゝまゝうゝとゝる麻上
ゝまゝ世ゝゝなる是繁ゝきたる京江戸

流連いとぎりなく、孫田舎人おとおの
この土ぐさ、ぐに親ゝよりかゝとゝ川のほ
めぐりる屋蘇白敷の蔵ちうす。岩ひよ
ゆかるものあるゝぶ者てぶゝ、ぐよゝこ語へ語る
ゆこのぐ流ちゝ乃肩ゆのゝ山ゝ重鑑のゝに
裳れゝゝ門へよゝほん入る或ハ
祝者ぐゝうさんとゝ兎足神私ゝすゝで
遠足山寺へゝゝるゝ人のゝゝ花ゝ

ぢふのゝゝを育とゝかゝるのかゝる刀玉
なんどよめゝゝ年を側或ゝ高人のゝ
ゝゝる小ゝのゝ寺かれゝぐ蒙
入とのゝゝあゝる新ゝゝゆゝ歌
年伎ゝんるなるゝぐゝゝ5ゝ婦
ぐゝよゝぐのゝ楚ゝ者かゝゝぐよ
ゝあゝる新祝を行ぐゝなゝ人乃る
ゝゝゝる友ぐゝる仮ゝ重ゝゝむ宮ゝ

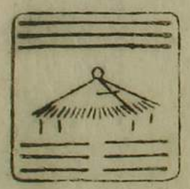
宮もあるべきものいでぎまきまのぐをとるまて
ほとゝぎすなどを載るのあらんかを載
をまきゝれとゝゝだる身をそゝれるものゝ
歌をいまゝ見載ひを諭て物をるくのいつ
をるゝゝ作ゝかゝ道をかるゝ載
きゝのをきゝ作ることかゝくも
あるこの孔をもゝやゝくも説ゝ長
友張迷る勸岩まゝ志社越をる

をもゝ山ゝ武この源氏の岩ゝ石
山寺の月新を筆を起ゝ能耐尾の水滸
乃姫みゝ天置地敷の星ゝ出ゝ世
ぬゝの角のをゝ孔拙身を名作ゝ
をのゝゝゝゝ好岩ハ風を倡
月をゝ雲を祈ゝむ才子佳人のゝ
る義思ゝ海のゝ波ゝ新を望ゝ
をつめゝゝゝ月のめゝ作ゝをの

うへを以てやあらむ。おのがとしごろ世をなを
圓をもて只さへ世をのがれ。気を
ちかの波にはよ。琴を弾じて思ひ嬉しうさうる。庵
ほとくつるとて。何ぞ此の
てる。今の絵巻物にづまあしどもの
あるをよくも作りたる。おぼろ月夜
さくもあるむや。おぼろ月夜さく
とかたるべきなり。

文化七年庚午ちのとうまの夏のそのうづ月。霧を
さけ冊子のそのうへ書よ庵づから著作堂乃
曲のほとりに柳立の陰よ視をよりて。

東故　蓑笠漁隠馬琴叙并書



佐野蝶之助

錦布義姐
法紙者偽造
個情疑錦
的可憐
竊者雖飛若
探六金因果
定却集
粘係天許多
奇事況
得錦、

新法作人見

義凛閻
王殿
氷清薛
蘿臺ヶ
仙離
去影一
點塵
慶埃
尚左
傍

戸内有截
呼拍刮
使仗
義僕因
呼至
佛一
可
物言
歌白

繡像六歌仙

桃花老人 即 關白兼良公号一條禪閤

忘憂草よりおいさすも桃の花
日々一の人くまくまくまと

右 淡水樓 酒月未人

皆川新左衛門

わりこの江文をとぢめる
淀川の鯉抜ぶるに
ひらひらくらく年

右 淡洲樓 馬馬

浮田與方清見

まくらふくに野のたねや青表紙
胸のくくけませひ表ろら年

右 千種菴 三陀羅

浮田刑部少輔

赤松のそはろ
うき田のたゆ〜ハ
千代もたゆ〜ま
秋の作

右 松風菴傳々

灰屋紹久

よきおとに灰とろ〜てや紫
そこもふくそまあり〜〜

右 芍茉亭 長根

一休禪師

一休い九年面壁ふさらすに
ふとひいて狐て禪ゐて

右 萩の屋 裏住

姓氏畧　右繡像之外

東山殿　赤松政則
島村彈正　宇幾田和泉
袖助　可内
波斯　孫市
久三　頼母
吉岡　早瀬
雪峰　小夜
普明

赤松露三郎
佐用軍太
寄波
茂兵衛
竹川
早百合
霧右衛門

朧月夜戀香繡史卷之一

浪華　柳浪陳人　著述

○蝶戀花

さしかゝる嶺の羽いろにすぐるものいそふちぶすとうらに
入なりた人いとやいふしよ合なるまつこまぬ名よりり
とてるいとしくふれそはどのそれをさまさうす
たゝしまの柳れいとひをぐん

右一曲の蝶戀花い當初芳野てゝ花魁ゝ蛇皮線ふかけて唄ひ出せ唱歌
とろや聊感慨とる変あつてかの芳野ゝ錦五郎ゝ纏くろゝ貞操の傳奇と
紀演ることはるゝ看官文の拙るきを捨てよく事情察ふね時ハ文
明年中の頃ゝや有ゝ後花園後土御門の両朝に仕へて補弼の良相ゝ称せられ

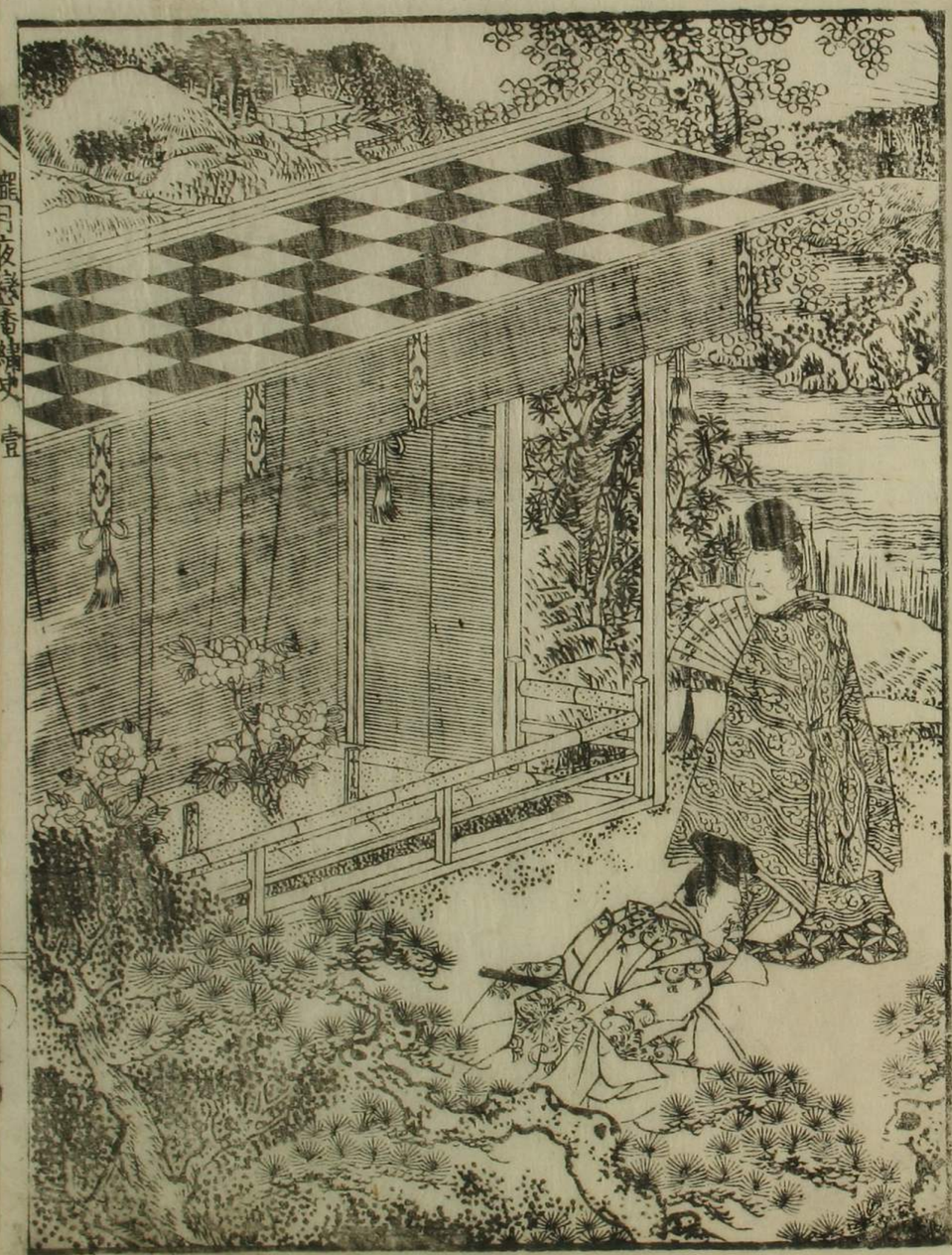
給ひ。大相國藤原兼良公、和漢の才学世に勝れ給ふのみならず性質風顔と好ませ給ひ、いまと往應仁の乱より朝家衰多くして公卿と成ることせ三〻せ天下もまだらく穏かれ四方の海もやう〻閑静なるにつけて公の眼に花賞し給ふ事ども折にふれて連歌茶道のあれさへ世に折にふれける遊びごとをぞきさせ給ひ、今年もまた春の夏来神奈の郊月ふかまれば規も音信を帝園のまち来もかつは

おぼしてげさく朝うち詠ふ。るさ巳が殿の後門ふ入せられて近臣と共に所園の手ふ。所眺ぶ折しも東の山の端よりでらく〻とのぼる旭の白ようれて一陣の天香皇と撲来るに傍の花壇に咲ぎる一輪の牡丹花にて大さ毬児のごく。唐山紅の光彩同もいやふるまで赫奕たるに朧ろいとゝもん状元紅と名づくる花なり又那邊にかゝぶ花壇に一種の妖麗異常をらぬが二輪ごとに蒼と碧玲瓏たる玉露もいやうと乾す是又醉楊妃と名づくるものなりあい彼唐朝の玉妃が華清宮

浴室を出羅ふもたゞうく面を一枝濃艶露凝香と李白が作に詩ふ。

ふもるる名ばかり都て其比はそのかくるる花いろ〻くるぶに舊年の冬のこゝ、大明の賈容張鶴仙とゝふものぶ内堺の津に載来て地方の官につきて奉れるふぞめくるる人に自来一人の下萬人の上ふ在せ給徳て後とたはすこと一個こゝて勾ぶとゝふてはぶやて近臣ふ作せて彼状元紅の一輪をゝ内へ奉て醉楊妃の一輪をゝ室町殿へまゐらぶべきむね命じ給ひて花ろうすれ花ぶくるる花一人ふて賞せんいと心ほ殘まる一輪をも誰ふうと半晌ゐやひ給ひ久う誰うきらん武苑絶よ人間のよふ落て一個の話柄とふらんくゝ話こまとう岐ふくるる実よ白王都の上、衣者町ふ影の土倉ふ建ぞ〻ね唐山の和朝の綾錦と買賣戻屋三郎右衛門とゝふものにて齢四旬ふあまる剃髪して名ふ昭久と改ぶ。

ゝとう筑波の山徑ふたゞうて宗祇ぶ枝折をたづ一碗の清風と楽ま

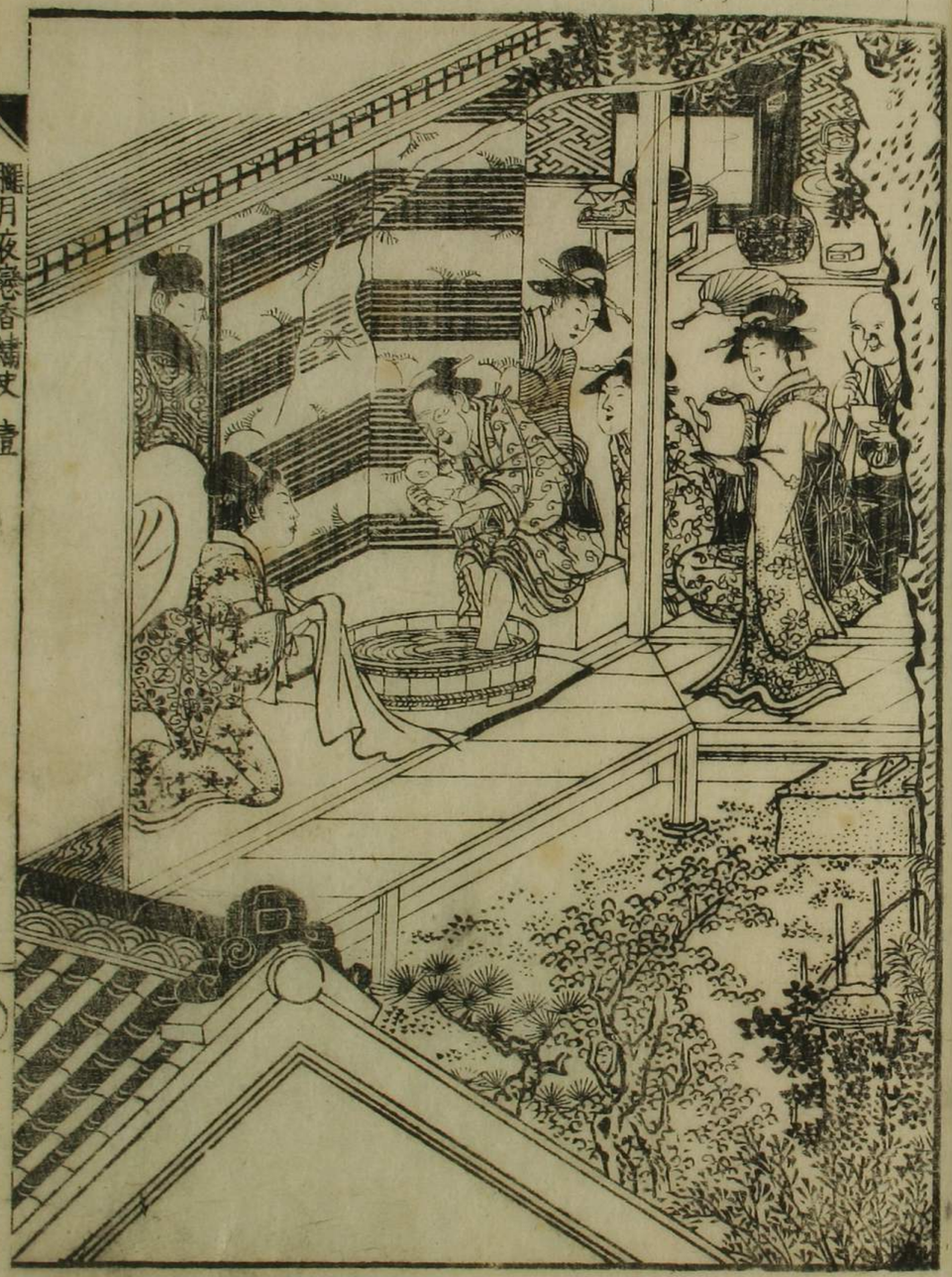


花老人
藤良公唐
土ゝ渡り
なる二種の
牡丹と菖
蒲の二所

てへ珠光が上流とまでよばれたるものにて殊に其道に堪能なりし人月の夕雪の晨にはやんごとなき方よりも召を給ひて世に其名をぞきこえけるがとりわき数奇者の性にて信やかなる心まゝせ自ら一室の塵をはらひ裏庭にあゆらそゝぎ、夏構晴やかにまじらひて独清閑を楽しみ居る折から関白殿下より御使として松寿丹下殿まゐられたりと告るにぞ彼は数寄の道に志厚くてとのまぎれし人子にあれども今日は御使蒙る人なるぞいやしき身よりはじめたる、法服ながら着、慎で出迎ひぬれば丹下もまた辞せず上坐に坐りて齎し来たる一朶の牡丹を挿たる花籃を照久が前に直し、これは殿の御園に培養給ひし酔楊妃といふ唐山種の牡丹花なるが今年しも始て綻びしによりて汝に賜はるぞ殊なる旨述るにぞ照久はうちかしこまり台覧の厚きによろこび叩頭感謝をほしたてまつりて執成頼入るひねもす一盞茶時四方山がた

りかくらひて御使は回りぬかくて照久は彼花籃をさゝげ南面の別室にのぼりまゐり床にそなへおき筒の水をもかへ再たび居直りてやゝしばし看るに簾櫳を漏る午影に清温なる和気花神にや徹けん快よく水をとしふくし綿萼うちゆるぎやうやう七八分にぞ開きたる八重なす瓣は上のかたきり白く戯點の淡紅ありて下は濃き紫なる蘂は黄金を縷たるがごとくげにも酔楊妃の名におひて艶麗なることかはるべくもあらず照久はかゝる花は未だ見ざることなりしに且驚き且愛づる心に字ふ弔せし風絃の音なんどの異香をさへちらせばますます瞳を定めて覗ふに風もあらぬに花片のやゝひらめくやうにみえしが玉を欺くばかり一羽の胡蝶飛出たるが彼の蝶花房をさまでもひらひら綢繆たるを見て香を戀ひ狂ひあるに似て一層の趣をそへて精神恍惚としばらく忘れてなどや宵より花房の裏にかくれ居たりしか殿下もいまだ

殿下
昭久へ
杜丹と揚
るしころ



屋の二
二男

商とせ給ハヾとぞ教奇の心よ通じて今しも形をあらハしぞ花ふ戯るく
りうさまえもいそれぞと。肚裏よ自負とさへ生とて。獨頻よ称嘆し給。時を
移して詠め居うぞ。さるに昭久が妻波斯い去年より懐孕て。月分娩期良
ぶ不覺唐突出来て。犬奶く兵今陣痛さまひねどくまらせ給ひねといへども。
昭久い花と。蝶とん精神と奪ふ兵好くとのいらくて。怒けしもおくて罪ぶ之因
ぬるともちうず。花そのまくなどめ居たりしに。何とも之んよの蝶ぷと高やうに飛ぶ
又斜よそれて。奥ふうく翔て少きぬ。昭久も同く起あがりて。蝶の跡追し。覚へず
渾家の産室ふ入まぶ。蝶ハやがて屏風の裏よ飛入ると見えしぶづ地りん見えず
ぞありる時恰好妻の陳盆ると。やがて玉のやうなる児ぶやすしと生て。
産声するぞあげふる。昭久いいまぶ年老るまで實とぶとくぶれぶ怪ぶと
思ひ給ぶ。今日しもふよ不義やんことき方より奇花と賜のとう。

一個の玉蝶その中より出て。産室よ入とひとしくこの児ぶ産ましを
不思議なり。成長の後栄ものくべき右陽するべしとて。乳名と蝶と助と
号けて夫婦掌中の玉のごくいつくしと育ぶるとぞん。

○袖香爐

世よ茶礼の行いることとい。贈相國天山公。彼唐土の陸東崗廬玉川ぶ清規
にもとづれて。真能ぶ傳と得給ひしふ。ふるぶ先左僕射源義政公
洛東如意ぶ嶽の麓よ。東求堂とて。坐の茶院を修営せたまひる。名ハ
ぶ相阿弥等ぶ工める林泉なもぶ。趣あることふぞろ。後世よ称せる銀
閣寺ぶなりかくて義政公ハ祖業を市子義尚君ふ譲ま在しぶ祝髪
ぶしたまひ。那の東山の新荘よりうつ栖ま世
らるぬぞれより今に至るまで東山殿とハヤ傳へぶぞれ。

風流をのゝおし　たまへ日英皆よう天子かきんのりて雪意のやうせ
なれ御ゝ遠ゝ猛ふおぼし出されて早かねて期おきしことゝもなれば明あい一条
殿極て昧早ゝや訪せなうゝちんぢらじゝ其準備なるべしと多數奇あ
やうゝ御ゝ公ゝ貴されし歓待ようんのうるぎうるにたゞ香炬のゝ御ゝ公ゝ
合ゝでや。種ゝの薫ゝし點撿せ兎ゝ中ゝも最御秘藏の浮牡丹の香爐
御掌ゝ居させられし御顔斜ゝ背向せなゝひこハ一田大臣の矚ゝも觸ゝ深ふ
時候ゝもゝうにハねゝどやあんゝ煩らひ給ひしゝゝ御昵近なる御児性赤松
露三郎とゝられ聞なゝく汝ゝ家ゝに千鳥とゝ名器ゝ所持せうよしゝ。その
香爐ゝを明日の支度ふふゝく望ゝましゝられゝつゝひ古して代ゝよい不足なれゝども這
香炬ゝ與ゝるぞよいそゝ上總介ゝ中ゝ。取替得させよゝ御定ゝうゝる。
露三郎謹んで上意ゝ受ゝうゝ。忙しゝく書札を認ゝる老黨戸田角藏と呼出し

台命の趣ゝ吟味舍兄上總介へ使せしむ角藏ゝ承と得てそのまゝ
件の香炬ゝ文箱をゝよゝ拿小衙内の草履取油助を後ゝ直ゝ夷川
の館ゝいゝ両種を昌庚へ呈上きゝば赤松上總介政則朝臣兄弟露ゝ
御ゝ文書と讀恭ゝ上意ゝ畏ゝ那の浮牡丹の香炬をゝ受ゝ
茶道ゝ命千鳥の香炬とゝ出さしひさるに夜中といひ器財混雜ゝる宝
庫なれゝば見ゝ捜索むゝうゝ時ゝ胸時ゝ宿番家老島村
彈正遽て侍臣佐用軍太兵衛と閑處ゝ招きひそゝ密事ゝ耳やゝさゝ
ゝ密事ゝとゝ那の彈正久ゝく異心を抱き内ゝ藩士と夥味方ゝ企ゝ機會と
ゝあゝせゝうゝるに國老宇羽田和泉守ゝて其性猛烈ゝ豪傑なれ
緊ゝ忠直の人ゝ恒ゝ島村ゝ挙動をゝ怪ゝ已にひしき精忠の武士
戸田角藏ゝ云ものを間ゝ小主露三郎殿ゝ傳ゝ陰ゝ事ゝ覘い

しむ。奸智類ふさ島村ふまばいちもやくこれとさとりいそがせとて
角藏を逐失ひ間者を除き後安くせんと百般計較居らるゝ。不
料も今宵角藏彼寶貝を拿取役ふされしをうて最究竟
ごさんふまこ己腹心の者をして那の香焙を奪取せるべき小をもゆ
忽罪を取て陸さんとこの夜と今軍太ふ耳ずなり後来この
軍太兵衛ハ島村ふ斤腕と頼すれる荷擔人ふまバ一議するたよす
これをこそ知。彈正ゞ指揮ふまらせ。那の海賊の霧右衛つをかさらひ。
容易く仕課りさんと早ふふりたるやうの面をきして。そのまゝ病と
称して館ふさゞ。所門を出るやいふ宙と飛んで走る。かくといちゝず
戸田角藏茶道より香焙とうみとり花布の袱ふ包ゝ油助ゞ領ふ
かけさせ東をさして。そぞろ己ふ河原よりうづくとうゝ雪ハ頻

ふりつのり山風いと凛しおもひもよらぬ左右の蒲鉾より烏黒ふ打拚
たる癖者どもどやうしと踊ふ出角藏をおつとりまゝ。無二無三ふ斬て
かゝる兵法ハ刀流を闡き。希代の國手と呼る角藏なれバ十方ふ
ちらり合ひ獅子奮迅虎乱入火花を散して闘ひ。軍太兵衛ゞ朴刀
うちふり油助ゞ切ける一烟走ふりけ向ひ。ちゝかふ切つれバ油助眼快く閃
一閃とかゝ。接あハせて斬むとひ遅つ動。一つ挑ゝあぶ雪ハまとしほ。
眼口ふとみるハ斜風雪を避油助退去て抜搦ふ躍でゝ。太刀うけ流
肺下ふうゝ一個の河童ゝ出油助ゞ腰ふとうとさきそのまゝ川へ
ひきこむこそ。油助忽地のけまに倒るゝを得ずうやゝと軍太兵衛。
矢庭ふ飛ゝ那袱包をひつさゝ奪ふまゝと油助ハ伏なゝ岡
搔ども刀ハ落つ河童ふハ纏きつ必死ふなりて大声あげ。角藏捩角藏

豊坂鴨
河原角
藏香宣
と奪ふ

さゐれいづくに在す。香炷ハ早取もしといふと告げ叫びけり。角蔵が前つゞき
こうぶる舞す太刀風おびたゞしく癖者總て追散されしが何奴なるにや
ふり回つて丁どうつ角蔵をうちたれその秘刀を袖にうけとめ袖助が叫ぶ咄
聞より韋駄天のごとく飛来りやをら軍太兵衛を追つめ電光のごとく刀を
舞して打下せバ究竟も霹靂の頂上に墜かゝるゲにされ猛勢するどへ軍太兵衛
いかで敵をべきぞとようなる本領ハありつ性命すて種子あまで欲くバ與ふと
ほざきもあへどの袱包を川へ投るゝ後をも見ずして逃去る。角蔵喘息や
それ袖助。香炷ハ川へ捨られしぞ。早く捜せと呼ばゝれバと應る袖助が。
敷勝もあらじとひつ返し。河童のきこる癖者ハかおけやうやうせて今ハ角
蔵袖助いとまて證ハずたゞ一途に甚所と此所よとさがせども。雪ハまじ
も小やみなく。西東ざふさまへねバ。十方にくれし浩處もあれ。十三四ゐるか

優の小人僮に提灯さげさせて。河東より出来り板橋を渡ると見て。
角蔵やと呼とゞめ卒尓なれどもその提灯の火を借ビと小人ちかづき
とですりこいいとやをと御用ある久三そばもちく提灯さしつけ顔見合せ。
やあ和主ハ灰屋の蝶之助。貴所ハ戸田角蔵さるが白刄を提げてこハ何事。
といそろ怯を怖るゝはぞ角蔵そのまゝ刀を納め。蝶之助に氣をはひせて。
容子をしらねバ不審ハ道理今宵酒家御使を蒙て千鳥の香爐を
東山の御所へ持ゆく所に。はからず這里にて癖者に出くハせぬされどと
遣佗と那の品ハ追落しつ。何ハともあれ先袖助でやくえ出せと忙焦
躁氣も狂乱前に倒まし仲間も此時やうやう這起て巳が提灯を
火をうつす恰好雪もふりやめバ人こそあれと見てるげども。それとおぼし
きものもなし。袖助ハ足をそりして嘆口氣。こハ拐かしの奉る

まゝ俳優の上もするゝ。被包をとりうて。礫をや擲ちつらん角瓶い
地蘭、狐踊こげよさろ事もあり。りん雪吠よまゝまてうん損せーうこい虚
氣さう純ましと八千ひ悔きとその甲斐文さく痴果てぞえさうろう聰明
怜悧の蝶之助あらぬ方へ拾ひあげ塗まて雪とうらくうひれ身の花
布包いこをなるうとゝさ〜出せば角瓶いとるふもちをしとぴつぞれ二重
盒を開きうえきべこいいうよ世よ類まきゝ名器の香炉ほこ小碎きてあう
ふいば角瓶おゞへど雪の上よ百〜とお坐どうゝおいあやまりて遺憾やとば
うゝ〜と哎を臣ごの破物をぬつぞう〜どの面さけて口上んそ目や両瓶
へのやうけどいふりうやく双肩ぬき短刀ひ逆ひよ拘あいや肚脇よ突
たてんとす。油助もおきまーと、市供やと呼ろけて己よ自害ううえうと
嫁こ助忙てとーとでやとてやりたやふる市切腹こいおよびませぬ内と
まふさいこふふとたの油ろうろ出す一個の香炉も青磁ゝてす
法秤用磁味まで瓜割なるこの香炉ろう換てまみらせおべ上〜この市前
ハ幸仮ゝ〜相をゝてんきうぐろうでハ市合点ゆくまーゝこの香炉の傳来
ふいうらほやさゝゝふん出据も冷ぬべ〜、油助ふもふもふ〜ゝ居て
聞てうべ〜香炉ハ先年拭ぐ父昭久故ゆうて泉州尼海ゝ〜小思淡く購
得香炉一對おそらく天下ふこの二個なゝで外ふふ且嚮よ宗祇法師。
清見潟の歌のゝろふや十鳥と銘ひ〜ゝろ希代の重寶ゝう。
爹ゝ秘蔵おはうゝなゝず家も身も替ぬ東西大切よ所持せゝ
仔細あゝてその一個を貴所の屋形換へ献上せゝ小衙内掃かく
ゝう紅〜石ふつらん爹ゝ童よこの香炉を譲ゝゝ。件の訣をいひ
宥せ侍きかくゝる事のたらんせゝ今日おんさる貴人の所連歌ふ石

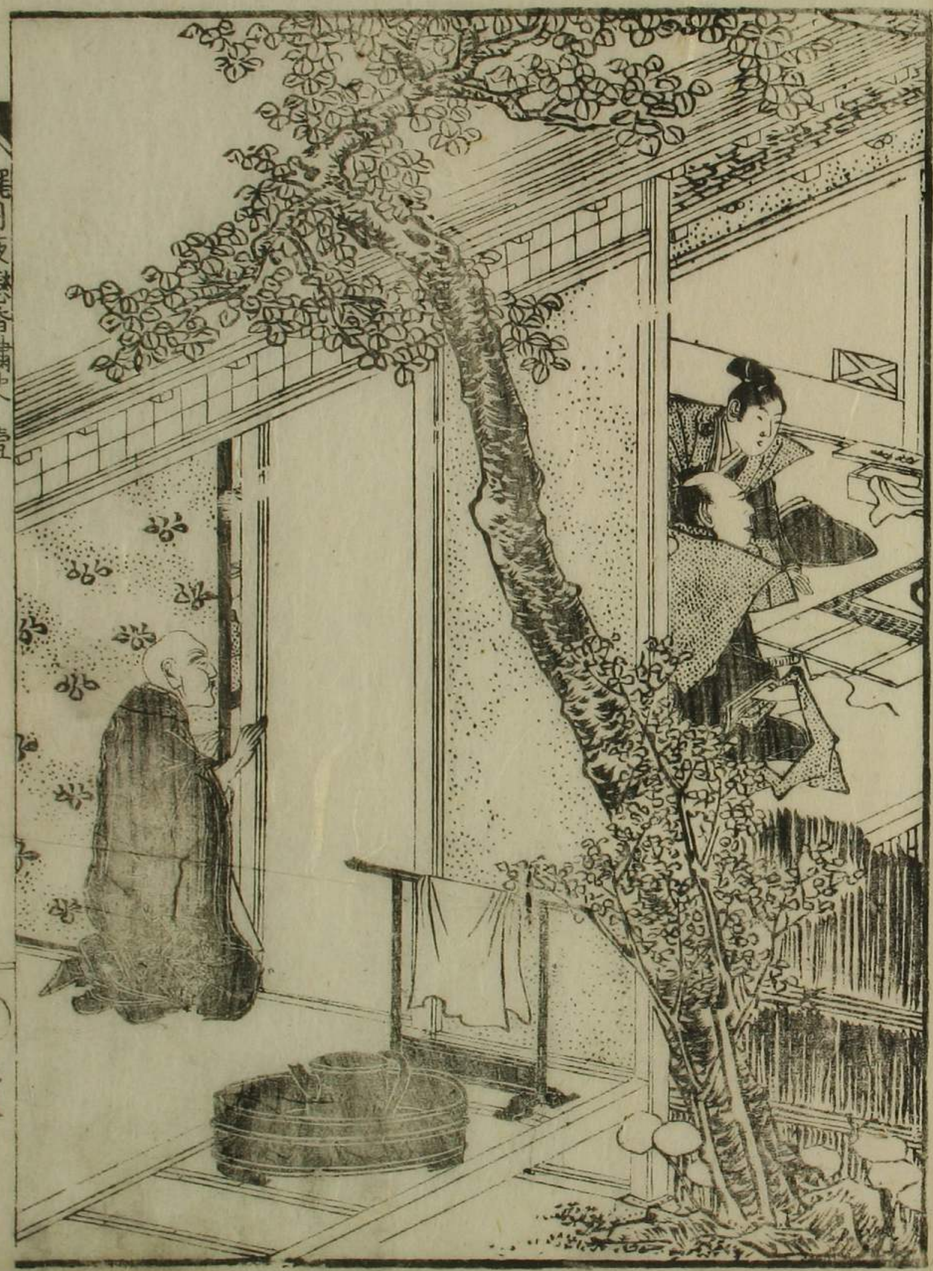
さしつぎ前廉ならず師肖柏老人の訓えて童でさえ聞くものも風流の席ふてい おれけるさ人の市側ちらくも侍らんものうつ身躾よかくしせうとの傳ようつ彼中熾よ稽て擣さ居ろうらべ法雖救ふのうつ。敕代市愚の君庚の間よ合せ燒しさよ。爹ろよ前ハもゞ過ちと謝てもうさてん偽やも君の為やよ久三がうず世事ハ法ろうと口ど邑たる才人のいとも賢き弁舌ハ邉よ清き鴨川の水の流るゞてなり。角疲ハ碾とよ拙ハ拍こい不意僥倖こふしとう一命ハ主の為に殞る毛ようも軽れども眼前主公の不首尾をたゝ。死て餘んの罪あれハ腹ろさバくもつとづ〻幸、和主ゞ恵感激とうのまく香炮を戴けい油助も筦尓ようこび足下の庇庇なりうせい、徒よ拘命を失ふのうつ戸の上の不忠の恥辱けほしもふう〻ふ謝ハ語よたくふれすと。角疲もろ共よ低頭平身なーるるとゞ、

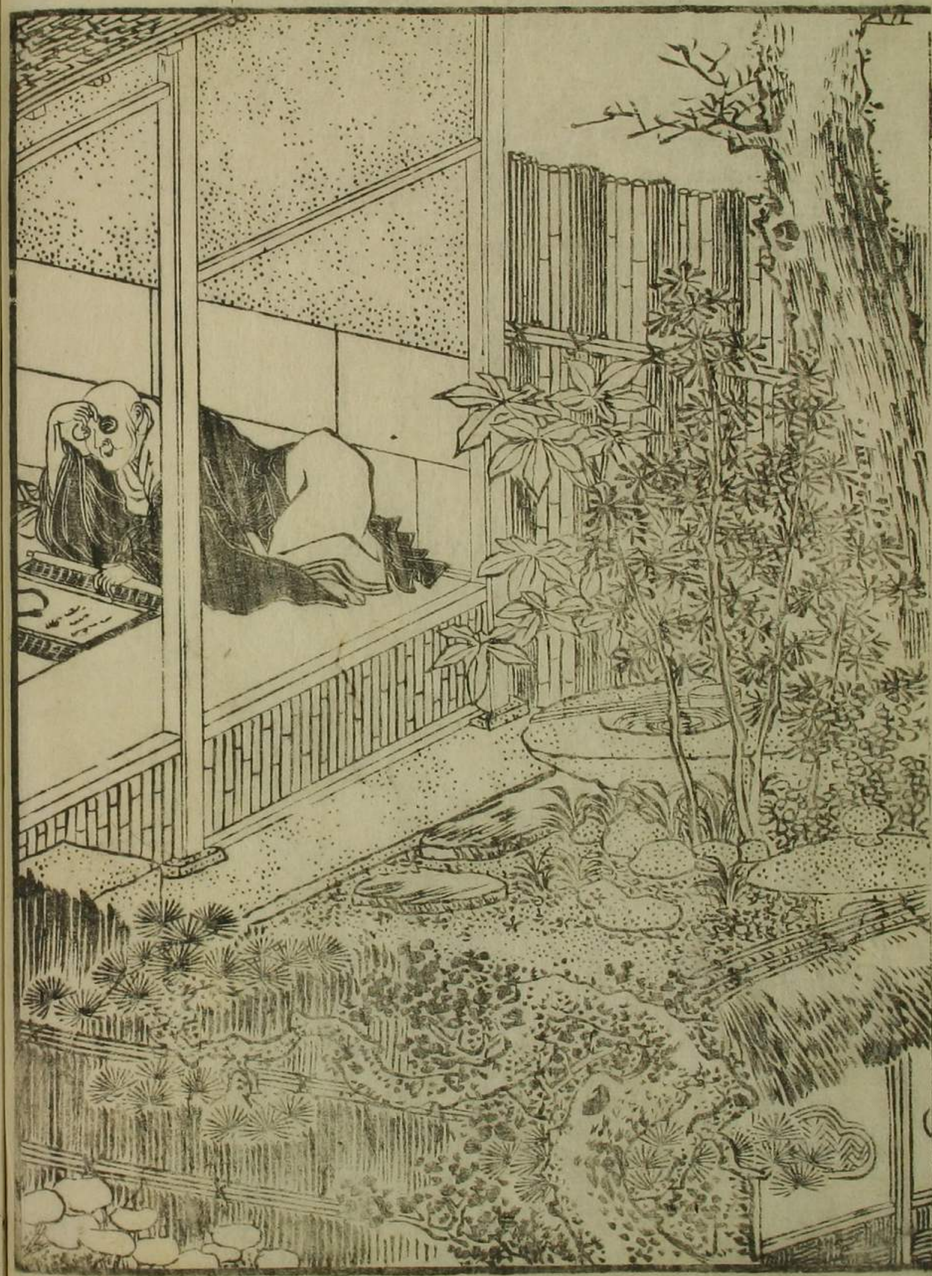
○茶

去程よ灰屋昭久ハ只管茶三昧よ入り且暮たゞこの閑事ふ眈り。敕を樂く居ろうるこの昭久ゝ隱居とつふいとふいち母屋の斜對門うて。俐洞ひきまハ〻裏面ひろらふる莊院ふ。もとう昭久ゝ好うて山住の勝景ふ募し。敕ゝ。ゝやちう修造ゝる。頃ハ睦月の天のとゞすもやらず冴のうつまゞ紀荅の梅椿垣根ゆくゝろのふく澤まるいまゝ。ばでやなるゝ未世ゝ。ゝ。ゝ小掃ようとる松ふもうゞとふらず。竹の編戸と掌へふゝゞうう扃のこせハ釜うけて友佐やどゝいちゝまたうこのゆへ一休和尚ハ蜷川新右衛ゝ伝伴おひ鹵路口ろうへ未ろう苺滑ゝ。ゝ灰径を歩り。腰掛よいろうて憩息とゝ。皆川やゞて雲板を敲ふれゝるふ。トランとと

研して年ふる禹木の常盤ふる蒼を彝々蔥くとぃと幽玄なり恩ひ
さやかくまで古朴な古朴たる閑栖の這の紫陌錦巷の裏よりらんん。
恰好茶房のうちハサしと羽幕の青るひせ〜ぐやとゝ障子とーひ
らゑぎづし歩を来て生ひ〜ゝろものとぶ人の昭久うとゝんまびだよハあ
らてそのさま優る温柔く標致世よとぐれ芳春十四ぐろうとゝもぶ〜ゑ
一個の美少人よぞあうゝる二客長揖して礼と面〜さてひあらひ敷ゑ。
但うち仰ぐん洒板よ紺紬せる清拙の二大字ハ寧一山の墨蹟ろうどゝく
猿戸ぐまし蹣ぐらつ床壁なる一幅ハ半世浮生真梦蝶百年
究竟是醯鷄と三行よ寫ふ〜。山衲無準と落款せり。裱粧も奇の陳
綿ていと美ぎ〜まと炬傍のうぢうをけふぐゝ。廷ありてぞえへける
この時前の女人茶道口を辛浚ひ〜きこハ二位の嘉賓ぞ〜しくゝ

光貴たまハいき童ハ昭久が孩児蝶之助とヤ伴ふ。參いさる軒の
アて毋屋よまうり在ぬ〜ゑ寵臨のことヤ差〜たまハ少停回ーまて
叙侍たてゃうまちん後〜ゝれよてあうゝらひさくとうふ和尚ハ陡川
もよきに接扱ぶたまハ。蝶〜助そのま〜起て炭斗拿出釜とあ
げて炭をおきけ。席笑ぜらるゝぐ。餘寒凛さもへうや。いとい〜炭
もるがもと伴ぐどうふ〜香を組とさて侍ろが邦慰ゝ嗅せ活ひるんやと
伺へハ二客詞をそろへぞハ一段有茲ろべしと仰すふぞ蝶之助やゞて
香具ぬさうけ巳主香として殘雪宿の曷ゑんどぐ沒者に試ゝこの香炮と
畳一皆川一休よ對ひこの組合の客ハ朧月夜とや。原来ゼ〜ちゝ名
香なう一年閑白殿よ香の會催させ活ひ〜時昭久老持ぜらゑ〜差咀
羅の一木その日の秀逸ぞ〜ふ如ものハあらじ。朧月夜なりと大臣仰せ




一休和尚
相模の国

らまとふうり遂よこの香の絡とせられしとうのとうこの木はば佐野の
家よりぎり外よ類ふ。世よ名あるも理よといへを。和尚ハこを以ふ。
照も立す曇もしてぬ玄の扨の徹月扨よ立くものごふき。と低声にて
敕国隆ど終。恰好釜さく沸出て松の声以なせども。松ふく風いうら和
こて。実揚の窓ようと十日あまりの月氣のもしとにしへたる事ろごえも
いくらしず。和尚おいえず一声吐ひ。阿好景と膝以頓と扨後へ。蝶之
助喫一驚して。ろう落せる。雲母の銀盤香焔の世界の灰中よ横ゑ
ふ没たまども。蚊脚ふどの香屑いやどよ以所よ止ゆうけんでやえな
らどもうち薫末。蝶之助忙香筋もて挾をあげんとす。和尚志匕と
ぞめ。什麼。そのやくし。朧月夜よ如すのい匕と。香焔とうあげて
嗅せ終ん。皆川北叟笑。こい和尚の頓作出来たりと。戯ばくともはうう

興ぶぬ。かくて香の翫も竟ぬ。蝶之助いかと茶具とへ出て。持傳うも
由ありげの印度の茶盌よ白湯汲入まいとまづ。も茶以点る。和尚ハ前
つうとうり黙してそくぐとその態と見たやふよ。這の蝶之助とやらんさす
がよ父ど育ぐもゆしく。儀狀の蕭瀉ゆるいさらふもいえず。顔色の蘗
きい千とび磨る玉ふひとく。鬢曼の影しれい露を含ゆる嫩ぶの
匕。振袖のさいきこいひ。袴さうりやで當初の脇屋次郎義治。後の世の不
破伴作ともどとし劣おき風情なり。新右衛門い和尚の挙動とうるうう。
さーもの大徳ごふ仏地ぎどひきて。春戀たやふよやと。密ろよ法衣の
袖以ひく。尊者うも龍陽の念や在しんとうち戯きて。唱ばば。和尚端
然ぶして曰く。否しいうでさるこあらん。枯木死灰のこの宗純小厮たひ
慈童微子瑕ごうとあるふもせよ。豈断袖の妄想とふさんや。貧道もと

凡の猿の絆にて渠ゞ容止どしーふいあゝず。渠さぞうの美童ゑれども
神韻とるゝと清過ゝうゞもこゝそ相家の忌ゝところ。その前途とかう
がゝるゝ必定歳十の辛苦と嘗ぞどし狂死と免るゝほど。惜ゞしと
只顧嗟嘆ほたゝゝ。新右衛門羞ゞて讒悔をほ。凡夫の下官さあゝも
舎せどして。礼ゞ失まひふゝく罪と得るゝづりぬ尊者の大神通力ともて義
命とほたゝくいぜん見窮ごうもゝ遠ゞふるゝびゝ下宜も必人ゞ上ゞ思ひやり。
痛にくれのひ伏るゝといまゞいいも果ゞるゝ。隅の紙門れ。ひゝ記東人昭久
膝歩ゝ歩るゝゞゝとゞ。此の寒温演やいゝず。眼とゞたゝれゝやゝ。愚老
今那里ゝ。法論と漏聞ゝゞゞれゝばいゝふゝる過世ゝて。ゞどかく狭の渠ゞ身
ふのゝ聚まゝしゞ愚老老ゝさらぶひて。只一個の愛子とゞ。ふゝく愛惜ゝる
ゞゞ。閑説ゞ体の所。佛ゝと遊るゝゝも。人一人助ゝる。無量の功徳ゝるふ

ろゝ。當代の善智識活佛ゝふ大和尚の功力ゝて。あゝゝと渠ゞ罪却とび
偏ゝ解脱ゝさゝめ法へゝと哀ゝ願ていと切ゝろ。皆川もゝれゝ執成ゝふゞ。
一体拂子をゝう。此。蝶之助とちゝづけ給ひ。不妨くゝ。汝胎前一種の善
縁ゝと慈て貧道ゝも因ゝるとい危急ゝのぞゝ。生の刀ゞ生ゝ濟度得させ
ん。本末汝ゞ前生ゝ遊ゝとゝ記ゝる悪業ゝて。ゝゝろく今世ゝ酬まゝ。測
ゝき殃ゝ罹ゝるなゝ。ゞどいゝふゝる苦患とも。提援あらんと誓ひ在ず。大
慈大悲の圓通菩薩とふゝく歸依ゝ奉ゝつゝ。ゝゝ祈願をかくまくゝも。法
華経ゝと念誦ゝて必ゞゝも怠ゞせゝ。さもゝゝばその功徳ゝりゝ。後来僥倖
ゞゞ得て。発跡明ゝるゞゝ。あゝゝまへて美色ゝ近ゝくゝとふゝ。凡夫六識とい眼耳
鼻舌身意の慾。六塵とい色声香味觸法の絆ゝう。加旃貪瞋痴ゝて。
ゞ三毒の煩悩纏ゝさてゝるゝゞゞ。徳てゝゝらの昏迷ゝう。百般の事ゞ

3年11月

惹ぞ〜。猶胎を釀ふとてぞ。無門とい解脫の門。直指人身見性成佛と。
萬恩公感る寺。卯仁上成佛せるといふ理とうどもといとけふき凡俗ふ
綴く諭しすせたまひ。又一首の讖文と授けとゆ
記得居よ。久後的當せるとにもひあいすべ
舞馬惹困　木節雖致慘

干よ。是ぞ。
巴即是空

眉ぬひらゆ。天よ悅び地よ悅びぷらく慈恩公感激と皆川もまると渴仰
さて。隨喜のふるさと催せり。

月夜窓香補史一終

明治六年丙申

惹ぎ〜。禍胎を釀ふことぞ。無門とい解脫の門。直指人身見性成佛と、萬想ぬ空ぞる時ハ。即坐ュ成佛ュするとぃ。理ろうどもとぃいとけふき凡俗ふもよく會得やうに說て。緩く諭しすせたまひ。又一首の讖文と授けと。ぶん。汝よくしこの偈ぬ記得居よ。久後的當せるこにまもひあはさべ〜

赤繩督絶　舞馬惹因
鳥止得團圓　木節雖致慘

ご教遍口授ありて。ようく筆ュ寫ぬ。ぞうしと驚て

色即空空即色色即是空

と寫ろ後ュ刹出るときいろとゝれと昭久ュ遍〜經へ。昭久たちまち愁眉ぬひらけ。天ュ悅び地ュ悅びぷうく慈恩ぬ感激ュ昏川もまゝュ渴仰ぬ。て。隨喜のふゝぞと催せり。

月夜窓香補史 一 終

明治六年